

■ 体験版 ■

猥談は美少女を誘って放課後の教室で

な
つ
め
夏目
な
つ
め
棗

□□注意事項 □□

普通にこのPDFファイルを開くとウィンドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大(125%くらい推奨)して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□□登場人物□□

●佐伯 奈穂(さえき なお) || 私立八女学院(やめがくいん)二回生。身長… 155cm、
体重… 44kg、スリーサイズ… 82(Cカップ)・49・77。



学年ランキング一、二を争う正統的美少女だが、けっこう大らかというか、アバウトというか、放課後とか底辺男子の猥談にも気さくに付き合える懐の広さがある。

● 乙幡 美麗(おっぱた みれい) || 私立八女学院(やめがくいん)二回生。身長… 169 cm、体重… 66 kg、スリーサイズ… 99(Hカップ)・63・101。



ビッチ系? 自らを「あーし」と称している為、皆からも「あーし」と呼ばれたりしている。学園内でウリをやっているという噂があるが、単に気があった男子とエッチしているだけ。奈穂とは対照的な立ち位置に見えるが、妙に気が合うようでよくツルんでいる。

- 高山 || 底辺男子 A、ノッポ、眼鏡。底辺男子三人組のリーダー的立ち位置。
- 太田 || 底辺男子 B、デブ。イロイロ裏がありそうな男子。
- 小川 || 底辺男子 C、チビ。底辺男子三人組の中でさえ最底辺（笑）。

放課後、部活を終えて教室に鞆を取りに戻った佐伯 奈穂(さえきなほ)に、底辺男子三人組のひとりノッポの高山が声を掛けた。

「ちようど良かったぜ、佐伯っ！……ぜひ、女子の意見を聞かせてくれっ！」

「ホント、貴方たちついていつつもツルんでるのね？……それで、なあに？」

「いやな、太田の妹がな……JSの頃にもう生えてたって言うんだが、いくらなんでもありえないだろ？」

「や、やだなあ……また、そういう話い？」

「そう、そう……『また』の毛の話っ！」

「あ、あのねえ……」

底辺男子三人組のひとりデブの太田の親父ギャグにあからさまに辟易した顔で奈穂がさりげなく逃げを打つ。

「じゃあ、わたし……帰る……ね？」

しかし、一步後退(あとじさ)った奈穂の手首を太田が掴む。

「いや、いや、いや、ゼヒとも教えてくれよお……佐伯っちが、下の毛が生え始めた

のっていつ頃だったのかっ？」

「そう、そう、それで、生えそろったのはいつ頃だったのかも？」

高山が被せた言葉に更に太田が追い討ちを掛ける。

「んでよお、佐伯っち……今は、どれくらいもじやもじやなのかも、なっ？」

太田と高山の遠慮のない言いように奈穂が頬を染めて抗議する。

「も、もじやもじやじゃ、あ・り・ま・せ・んっ！」

その奈穂の絶句を聞いた底辺男子三人組の残りの一人チビの小川が困ったように訊いたのだった。

「ひえっ？……そ、そ、それじゃ……佐伯さんって、パイパン……なのお？」

「ち、違います——っ！」

彼ら底辺男子三人組が奈穂や親友の乙幡 美麗（おっぱた みれい）に猥談を吹っ掛けるのはいつものコトだった。

しかし、奈穂と美麗——傍から見ると両極端に思える二人である。

奈穂はといえは学年ランキング一、二を争う正統的美少女でありながら、学業成績でもトップ一〇を外さない才媛でもある。

一方、美麗は所謂(いわゆる)ビッチ系である。さすがに今日日ガンダロにしているが、学園内でウリをやっているという噂(実際は、単に気があった男子とエッチしているだけなのだが)もある。また、自らを「あーし」と称している為、気のあった仲間からも「あーし」と呼ばれたりしている。

こんな奈穂と美麗は対照的な立ち位置に思えるのだが、妙に気が合うようでよくツルんでいた。

そして、そんな二人に放課後など微妙に絡んでくるのが底辺男子三人組の高山・太田・小川だった。美麗はともかく優等生の奈穂が、彼らの猥談にも気さくに付き合えるのは意外だったが、彼女はえっちに關してけっこう大らかというかアバウトというか妙に懐の広さがあった。

それは例えば、エッチ済みな元彼が数人居るなんて話を隠さなかったり、それ処かエッチの最中のオトコの滑稽さを美麗と愉しげに語り合ったりするのであった。

勿論、そんな時は『推定童貞』の底辺男子三人組はもっぱら聞き役だったのだが。

だからそんなある日、三人組のリーダー格の高山は、かねてから三人の間で苛立ちの種になっていた『ある噂の真相』について尋ねてみた。

「なあ佐伯……あのサッカー部のキザ野郎と別れたって、ホントか？」

「いや、あり得ねえと思うが、おいらは佐伯っちが振られたって聞いたぜ？」

太田が言い直すと、小川は悔しそうに俯いたままだ。

——そうなのだ、彼ら三人のマドンナ（いや、学院のマドンナだが）である奈穂が学院男子の共通の『敵（笑い）』であるサッカー部の（いけ好かない）キャプテンと交際しているという噂でさえ許し難かったのに、ヤツから彼女を『フツタ』などというのはあつてはならない話だったのだ。

「やだなあ、違うよう……どつからでた噂なのう？」

奈穂が困ったように言うと、美麗がその背に抱きついて爆弾発言をしたのだった。

「そう、そう……あんまりエッチが下手だったから奈穂ちゃんから振ったんだぜっ！」

「「「な、な、なに——っ!!」」」

三人組が泣きそうな悲鳴をあげたが、奈穂は慌てて訂正する。

「う、嘘、うそ、ウソですう!!……学院の男子とえっちなんでしないよう……」

「そう、そう……奈穂ちゃんの彼氏はイケメンの大学院生だもんね〜っ♪」

『イケメン』というワードに三人の顔に暗い怨念の影が浮かぶ。

「イケメンじゃないと思うけど、山口さんとは別れたって言ったじゃない……」

「ええっ？ ……そうだったけ？ ……でも、あの人エッチがすごい上手だって言ってたじゃんっ♪」

「それは、そうだけどう♥」

何を思い出したのか幸せそうな笑みを浮かべた奈穂に、またもや三人の顔に暗い怨念の影が浮かんだ。

「まあ、お前ら『童貞三人組』には永遠に縁のない話だろうが、『オトコの価値』は顔じゃないからな……実際、お前らの嫌いなあのキザ野郎も、マジ下手くそだったからさっ！」

「や、やだ、美（み）ーちゃん……彼と……シタ……の？」

「うぶぶ、マジ最低だったぜ……実はな……」

美麗は奈穂の耳元で「こしよ、こしよ」と何やら不穏な話を吹き込んだのだった。

また、いつだったかこんなコトもあった。

奈穂が大きく欠伸した口の中を太田が覗き込んだ。

「にや、にゃんらほう？」

欠伸に涙ぐんだ奈穂に太田がのたまう。

「いや、処女膜があるかと思って……」

「んなトコにあるか——っ!」

しかし、太田の頭を叩いて突っ込んだのは美麗だった。

「ええっ!……シヨックう!……佐伯、処女じゃなかったんだ——っ!」

わざとらしく口を挟んだ高山をまたも叩いたのは美麗だ。

「だから——っ、んなトコに、処女膜があるか——っ!」

「えっ!……だから処女膜、ないんでしょ?」

「もおう、わたしが非処女なの隠してないわよう!」

奈穂が平然と訴えると空かさず高山が言ったものだ。

「いや、いや、いや、美少女は《処女膜》も再生するって聞いたぞ♪」

「んじゃ、あーしの《処女膜》を確認するう?」

「いや、俺は『美少女』って言ったぞっ!」

「殴りたいんかっ!」

「いや、だから殴ってから言うなよお!」

殴られた高山の横で太田が、にまつ、と笑って言った。

「はい、はい、はい、おいら見たい……見して、あーしのマンコの膣内(なか)♪」

「ぐぬう!!」

太田の正論(?)に一瞬詰まった美麗だったが空かさず切り返す。

「お、おーし、見せたるじゃんかつ! ……そのかわり オメーの童貞チンポを見せるのが先なつ!」

「いや、ど、童貞じゃないしい……」

語尾を、ごによ、ごによ、と濁す太田に美麗は鼻で嗤(わら)って近づくとき彼の耳元で囁いた。

「ふふん……『お年玉』を幾ら注ぎ込んだのかにやゝあつ?」

「なつ!! ……な、なんの、コト、かなあ……」

一瞬、ぎよつ、となった太田だったが、視線を逸らしてすつとぼける。

すると、美麗は太田にしか聞こえないように更に声を落としてこう言った。

「実の妹に土下座とか、あり得なくねえ〜っつ?」

「にや、にや、にやんとすと——っ!!」

「しかも、挿入は断られるとか、マジ、笑えるんですけどお〜っつ?」

「ひよええええええええつ、にや、にやんとそりをお——っ!!」

美麗の声が聞こえなかった奈穂たち三人は太田が何かに怯える様子に小首を傾げる

しかなかった。

そして、美麗は皆に聞こえる声で言い直したのだった。

「……んじや童貞じやないチンポ、見せてみっ！……奈穂と二人で『審査』しちやるけえ！」

「いいわよう♥」

奈穂も美麗と並んで太田の股間に視線をホールドした。

「へんっ！……ま、マンコなんて見慣れてるしい……い、今更《使い古し》のあのマンコなんて見たくねえつてのっ！」

「あら、あくら、ざあくんねんっ……『童貞三人組』のおチンポ三本、開チンしてくれたらあ、あーしただけでなく奈穂ちゃんのおマンコもお、見上げたのにい♥」

その言葉に『童貞三人組』いや『最底辺三人組』が色めき立つ。

「「「ほ、ホントか——っ！」」」

「ちよ、美(み)ーちゃん、わたし、やだ、よう！」

奈穂が慌てて美麗に詰め寄るが彼女は平然と言い放ったものだ。

「平気、平気……こいつらに、美少女の前で童貞チンポ曝けだす勇氣なんてないって

……なあ、『童貞三人組』さんよお？」

「「「うっ……」」」

どうやら美麗の言うとおり『チキン三人組』だったようであるが。

しかし、今日はその相棒の美麗が居ない。奈穂は強気で猥談を仕掛けてくる三人組に、鞆を胸に抱えて些か逃げ腰になっていた。

——そして、それがどうして『そういう話』になったのか。

「「「受験のお守りにゼヒ一本くださいっ！」」」

三人が申し合わせたようにL字に腰を折り最敬礼を決める。クラスの最底辺の三人でも受験生に違いなかった。

そして、奈穂は押しに弱かった。

「わ、わ、わ、判ったわよう……い、一本ずつで……い、いい、い、良いんだよね？……ちよつと、あつち、向いていて……」

『あつち、向いていて』と言いながら、奈穂は自分が後ろを向いてスカートの裾を

摘まんだ。

「いや、いや、佐伯い……お守りだよ、お守りっ？……十把一絡(から)げにしかも三人分まとめて、ぶちっ、とか抜かれてもご利益ないって……」

確かに高山の言葉には説得力があった。勿論、どうでもいい案件ではあるが……。

「じゃ、じゃあ……どうすれば……？」

スカートの前を少したくしあげた状態で高山の言葉に振り返り小首を傾げた奈穂の白いショーツが、ちら、見える。

何故か少し前屈みになった三人の視線に気づいた奈穂が慌ててスカートを戻すと、高山が大真面目な顔を作って言った。

「ここは俺たちに、じっくり、この一本って《毛》を選ばせて欲しいっ！」

高山の言葉に太田と小川も大真面目な顔で、うん、うん、と頷く。

「む、無理、むり、ムリ、絶対ムリっつ!!」

(いや、いや、いや、いやあ……そんなの……あ、あり得ないっつっ!)

耳まで真っ赤になって奈穂が首を横に振る。

「……だよなっっ！……やっぱり、佐伯でも、俺らみたいな底辺男子との約束なんて簡単に反故にしちゃうんだ……」

いつ『約束』したのか問い返す事もできずに奈穂の視線が困ったように泳ぐ。

「そ、そんなこと……いい、言わないでよう……」

そして、ここぞ、と高山が訴える。

「全部脱がなくてもイイからよお……ちよこつと、パンツの中を覗くだけだから……
なああ？」

太田と小川も大真面目に、うん、うん、と頷く。

「……で、でもう……」

(……………は、恥ずかしい……よう……………)

「佐伯のだったら、ゼクツタイご利益あるよな……俺ら底辺男子でも希望のトコに合格できるんじゃないかって思えるよな……欲しいよな……♪」

何が何でも押し切ろうと高山が更に訴え太田と小川も、うん、うん、と頷きまくる。
「だってえ……は、恥ずかしい……もん……」

奈穂の反応が『拒否』から『羞恥』へ変わったのを感じて、高山がいきなり教室の床に土下座を決める。それを見た太田と小川もその後ろで床に額を擦りつけた。

「や、や、や、やめてよう！……ど、土下座なんてっ！」

奈穂が困りきって後退(あとじさ)る。

「あ、頭をあげて、よう……」

「いや、俺らの本気を判ってもらうまで動かねえっ！」

高山の言葉に奈穂が短いスカートの裾を握って唇を噛む。

——どれくらい沈黙が続いた、だろうか。

土下座男子三人の無言の圧力に、奈穂の心が……折れた。

「わ、判ったわよう！……だけど……あ、あんまし……ち、近寄らないでよう？」

奈穂は……押しに弱かった。

「「ほ、ホントかつ」「」

まさかのOKに三人の底辺男子が色めきたつ。

「おい、おめえら、机を並べんぞっ！」

高山の指図で簡易ベッドを作ると、奈穂に促した。

「ここ、ここに、寝てくりや……う、うん……寝てくれ、佐伯っ！」

あまりの展開の速さに奈穂は流されてゆく。

「い、いっつ？」

頬を染めて並べられた机に仰向けに寝そべった奈穂が、スカートの中に両手を入れて、少しだけショーツを摺り降ろす。

それから、スカートの裾を掴んで震えながら声を搾りだす。

「……あ、あ、あ、あんまし……顔……ち、ちか、近づけないでよう？」
顔は耳まで真っ赤だ。

「……う、うん、うん……」

羞恥ゆえに、三人の底辺男子の（鼻の下の伸びきった）顔をまともに見れなかったのは、奈穂にとつては幸いだったのか……いや、いや、不幸だったに違いない。

「じゃ、じゃ、じゃあ……さ、さつさと……して、ねっ！」

覚悟を決めたように奈穂は握りしめたスカートの裾を捲りあげた。

「……お、おおうっ!?」

曝けだされた真っ白な奈穂の下腹部の淡い翳りが、底辺男子三人の心を鷲掴む。

「き、き、綺麗だっ！」

珍しく真っ先に声をだしたのは小川だった。いつもは雄弁な高山も、ふてぶてしい太田も、声もだせずに見蕩れている。

今日一日、ショーツの中に押し込められていた奈穂の下草は、くしゃっ、と丸まっ

ていて底辺男子三人の眼を射抜く。

しかも、下草の下辺あたりまで裏返って摺り降ろされた白い透けレースの紐ショーツが……何ともエロい。

「だ、だから……ち、近い、ちかいつて……っ！」

薄目を開けた奈穂が泣きそうな声をだす。

「お、おう……す、すまねえ佐伯……み、見蕩れてたぜっ！」

「ば、ばかりっ！……は、恥ずかしいんだから……さ、さっさとシテっ！」

「じゃ、じゃあ……お、俺から……」

底辺男子三人組のリーダー的立場の高山が、声の震えを必死に飲み込んで手を伸ばした。この男、意外に気が小さいのかも知れなかった。

「じゃ、じゃあ……さ、さ、さ、サワるぞ……佐伯……」

声を裏返しながら言葉を搾りだした彼の指は、しかし、寸前で止まった。

「……な、長いのが、イイんか？」

誰に訊いたのか高山の声も眼も泳いでいる。

「やっば、太いやッだろ？……いや、太いのはおいらのチンポっ♪」

意外や太田の方が肝っ玉は据わっていた。

「お、お前なあ……じよ、女子の前で下品なコト……い、言うなよっ！」

「な、なんでもいいから……は、早く抜いてっ！」

奈穂の声は半泣きだ。

「い、一番、縮れてるの……とか？」

反対側から、ちら、ちら、と視線を投げていた小川が言った。

流石に『縮れてる』発言は恥ずかしかつたようで奈穂が叫ぶ。

「だ、だから……ど、どれでも同じだっつてっつ！」

その時だった――。

何か閃いたように高山が言った。

「ちよつと待つつす、ご利益って考えたら……やっぱ、観音さまに近いトコに生えてるお毛けがイイんじゃないね？」

「い、いや、いや、いや、いや、いやっ！……無い、ない、ナイ！……そ、そ、そんなトコに……は、は、は、生えてないってえ!!」

悲鳴まじりの奈穂の声に、太田がトボケたように訊き返す。

「観音さまって、ドコよっ？」

「判んだろ？……佐伯の観音さまっ……ついたら、両手合わせて 拝みたくなるトコ

に決まってんだろっ！」

「んあっ？……あつ、ああ、マンコね？」

「ば、バカ……だから、女子の前でおマンコなんて言うなよっ！」

二人のチン問答を遮って奈穂が叫ぶ。

「だ、だ、だからっ！……生えてないっ！！」

「まあ、まあ、佐伯っちはそう言うが、確認だけさせてもらおうぜ♪」

意外と肝っ玉の据わっている太田が他の二人に目配せして奈穂の膝を抱えた。

「んじゃ、ま……失礼して……」

高山と小川がどうやって奈穂を押さえたら良いのか途惑っている内に、太田が思いのほか大胆に両足を抱えて、ぱかっ、とM字に開いてしまった。

「い、いや、いや、いや、いやっ！……あ、足広げ

ちや、ダメっ！？」

恥ずかしいのなら手で隠せばいいのに、奈穂は両手で顔を覆って身悶えている。

「」「す、すっげーっ♪」「」

太田の感極まったような声に、高山と小川も後ろから覗き込んで、三人が三様に両

手を合わせていた。

「だ、だ、だ、だから~~~~っ!? ……んなどころ、拝まないで~~~~っ!?」

「さ、さ、さ、佐伯……き、き、き………」

完全に舞いあがった高山の言葉を小川が補完する。

「綺麗だ——っ♪」

そして、今やリーダー格に昇格した太田が指摘する。

「佐伯っち、ウソついたらダメっしょ? ……ちよこっただけど、生えてるんでないかい?」

(うううう~~~~っ……は、恥ずかしいよ~~~~っ~~~~っ~~~~っ!)

「ご、ご、ごめんなさいいっ! ……そ、そので良いから…は、は、はやく抜いてくださいい!」

女子の一番恥ずかしい処を三人の男子に覗き込まれて、早く終わってと奈穂が祈るような声を搾りだす。

「んじゃ、おいらからでイイよな?」

立場が逆転した太田が高山に了解を取って手を伸ばす。

しかし、股上のふさふさした部分の毛と違い、大陰唇周辺のそれは短いうえに汗ばんだ肌に密着していて、抜こうとするだけで肌に指が触れる。

「ひんぷん♪」

微妙な場所を触られた奈穂の口から桃色の声が零れた。

「わ、わ、悪りい……わ、わざとじゃ……」

流石に太田も焦った声音で詫びたが、実は奈穂もそれどころではなかったのだ。

「わ、わ、わ、わ、判ってる……だ、だ、だから、良いから、早く……は、はや
くう、ぬ、ぬ、ぬ、抜いてえええっ！」

(ど、ど、どうしよう……ちよっと、濡れちゃってるよう……)

——その時だった。早く終わりにして、と祈る奈穂の心を切り裂く太田の声が聞こえた。

「……あれえ？……佐伯っち、もしかして、濡れてるんでないっ？」

「な、な、にやいいっ！……しよんにやこひよ、にやいい!!」

必死に否定する奈穂の声は完璧に裏返っていた。

「ホントかなあ？」

そして……………。

——じゅずずう、じゅるっ、ずずずずず、じゅぶるう……………

茜色に染まる教室に太田が啾る卑猥な水音が響いたのだった。

「やだ、やだ、やだあ！…………舐めちや、だめえっ！…………

音立てて啾っちや、やだあっ！」

両手で覆った顔を左右に振り乱して奈穂が涙声で訴えると、漸く我に返った高山と小川が口々に言いだした。

「お、おまつ…………お、おりと、かわりや…………」

「ぼ、ぼ、ぼ、ぼきも……………にや、にやめたいっ！」

しかし、太田はいきなり降って湧いた《ウルトラスペシャルラッキー》を手放す気は更々なかった。

「やだねっ！…………それよか、お前らも佐伯つちに舐めて貰えばイイじゃんか？」

「おっ？…………お、おおおうー！」

いきなり高山がズボンを脱ぎ捨てるとブリーフから勃起した《ペニス》を取りだし奈穂の顔に近づけた。

「さ、さ、しゃえき、ひゃん……」

舌を縛れさせた高山だったが、奈穂の右手を取り己の《ペニス》を握らせる。

「お、おお、お、おにやがひ……」

この場に居ない者には何を言っているのか判らないだろうが、握らされた奈穂には高山の希望が嫌という程よく理解できた。

(やだ、うそ、硬くなってるようっ!!)

薄目を開けて握らされた《それ》を、ちら見、した奈穂は精一杯訴えかけた。

「……わ、わたし……わたし、さあ……上手じゃ、ない、よう？」

しかし、そんな言葉で諦める訳はないのも判ってはいた。それに、上手だとは思っていないが、フェラチオは年上の元彼から随分仕込まれてもいたし、基本的にそれ程嫌いでもなかった。

そして、太田の下手ながらも夢中でしゃぶる股間からの刺激が、奈穂の官能にも火を灯し始めていたのだ。

「にやにやぎや、いひ、ひまふう！」

握らせた手指の中で高山が腰を振り、切なげに訴える。上擦りまくる声音に奈穂はほだされたのかも知れなかった。

「しょうがないなあ……今日だけだよ？ ……クラスメイトとえっちなんてしたら明日から顔を合わせずらいからねっ！」

そして奈穂は、はむんっ、と啜えたのだった。

「……（ひゃ、はうう） ……」

生まれて初めての快感に高山が声もだせずに身悶えた。

——はぶ……う……ちゅぶっ、ちゅぽっ、くちゅっ……にゅぽっ、くぶっ、ちゅぶっ……
ぢゅぶるるっ、ちゅぶぶっ、ぢゅずる……くぶっ、くちゅ、ちゅぼっ……

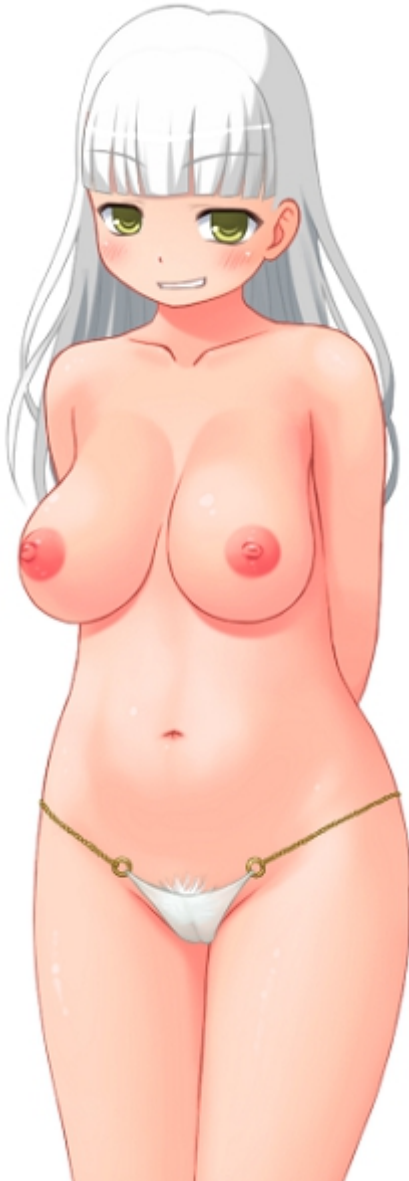
更に続けざまに齎(もたら)された官能の嵐に高山の脳はピンク色に染まっていた。しかし、それを見た小川が泣きそうな声で訴えた。

「……………ふ、二人とも……ず、ずりゅいっ……ぼ、ぼ、ぼきも……な、舐めたり……な、舐められたり、したいよおおおっ！」

——その時だった。

「呼んだか〜いっ?」

何やらハイテンションな声とともに「まっ裸(ぱ)の、いや極端に布面積の少ない
ショーツ一枚の美麗が机の陰から現れたのだった。



「「「わひゃああああつ!?!」」」

舐めてる方も、舐められている方も、異口同音に悲鳴をあげた。

いつ入ってきたのか、何故ほぼ《まつ裸(ぱ)》なのか——それは今、たいして重要ではなかった(たぶん)。

そして、美麗は口をぽかんと開けたままの太田の襟首を掴み、締めあげた。

「おい、デブっ！」

普段は苗字で呼ぶ美麗の怒りの深さが知れた。

「あーしの大事な親友のおまんこを舐めた罪、万死っ！」

続けて、未だブリーフから《ペニス(突然の出来事にフニャっていたが)》を覗かせる高山を睨みつけて言った。

「ノツポっ！……あーしの大事な親友のお口を穢した罪、万死っ！」

視線で奈穂に机のベッドから降りるように促して、美麗は空いたそこに太田の顔を押しつけた。

「お前ら二人は罰として、あーしが《童貞》を散らしちやるっ！」

その美麗の宣告に二人は微妙な顔をした。

「……………」

それは『罰』なのか——そんな微妙な感想が二人の心の奥に根ざしたが、美麗はま

るで気にした風もなく二人に命じたのだった。

「さっさとズボンとパンツを脱いでそこへ寝ろっ！」

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。
本篇では、この後はほぼノンストップでエッチシーンです。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。